

ヴォルフガング・リーム

解説:沼野雄司(音楽学)

ヴォルフガング・リーム(1952～)はドイツのカールスルーエ生まれの作曲家。20代初頭から頭角をあらわし、その後は弦楽四重奏曲、交響曲、歌曲、オペラといったあらゆるジャンルで膨大な作品群を産み出すことになった。初期作品の饒舌な表現力や引用などから、もっぱら「新ロマン主義」という枠組みで捉えられてきた感のあるリームだが、むしろ音楽界全体にそうした傾向が一般化してくる80年代以降からは、ドライで前衛的な響きや、晩年のノーノ(かつての師にあたる)との精神的な共通性を感じさせる静謐な響きもしばしば用いるようになった。還暦を越えてなお、その創作はさらに大きな振幅の中にある。

Geste zu Vedova ～ヴェドヴァを讃えて

2015年に作曲・初演された。11分ほどを要する。タイトルの「ヴェドヴァ」とは、イタリアの前衛画家エミリオ・ヴェドヴァ(1919-2006)を指している。ヴェネツィアに生まれたヴェドヴァは、大戦中はレジスタンス運動などに参加したのち、アクション・ペインティングの手法を用いてイタリア抽象絵画の牽引役を務めた人物。荒々しい色や線がキャンバスに叩きつけられた彼の絵画からは、誰もが画家の身体の動きを感じるはずだが、実際、ここでリームが目指しているのは、ヴェドヴァの絵画の身体性を、さらに音楽へと変換することにあるように思われる(その意味でダンスとのコラボレーションには格好の曲といえる)。

曲は比較的シンプルな作りといってよい。4つの楽器が「線的」に推移する部分と、4つの楽器が「リズムのユニゾン」による打楽器的な音響を奏でる部分が規則的に交替するという構成(時として、全く同じ内容のセクションが繰り返されたりもする)。当然ながら、身体性と直接的に結びついているのは激烈なリズム・ユニゾンであるわけだが、しかし線的な部分も、その流れるような上下行が画家の筆の運びを感じさせる。終始荒れ狂った音楽は、しかし終結部で初めて、柔らかなピアノシモを響かせて曲を閉じる。

弦楽四重奏曲 第3番〈胸裡〉

1976年、作曲者24歳の年に書かれた弦楽四重奏曲。30分弱を要する大曲だが、目の詰んだ緻密な書法によって、初期の最高傑作のひとつに数えられる。タイトルは「事象のもっとも奥底」といったほどの意味で、リームがここで目論んでいるのは、一種の無意識的な世界、神秘的な胸裡への降下と言ってよいだろう。

実際、楽曲は1～5楽章で現世的な苦しみにのたうち回るが、間奏曲を経た終楽章において全く別の世界を開示する。いわば、楽曲全体は終楽章へと向かう道程であり、各楽章がひとつひとつゲートをくぐるようにして奥底へと迫ってゆくのである。

第1楽章はschroff(「ギスギス」と「激しく」といったほどの意)と記されている通り、切れれば血が噴出するような表出力にあふれた音楽。中盤は「ダンス的」なリズムもあらわれる。第2楽章は、テンポこそ落ちるものの、やはり厳しい響き。ただし後半、突如として薄いテクスチャによるコラールに転じて、奥底に潜んだ「胸裡」を一瞬垣間見せる。第3楽章は、不穏な進行の中にふと属9の和音が響いたりする複雑な表情が特徴。「きわめてよく延ばして」と記された第4楽章は、一種の緩徐楽章だが、緊張と安堵の間を揺れつつ、最後は意味ありげな同音反復を繰り返す。第5楽章ではおそらく最後の闘争が描かれており、4本の線が入り乱れ、強烈な下行グリッサンドを交えて乱舞する。

その後に置かれているのが「間奏曲」と題された短い部分。弱音器付きをつけた4本の楽器がただゆっくりと、1分ほどたゆたう中で、1～5楽章とは全く異なる世界が開けることが示される。

こうしてあらわれる第6楽章は、いわば「胸裡」に到達した世界。およそ10分弱の時間の中で、祈りと苦悩がゆるやかに交差するが、しかしもはや時間は完全に止まっており、現実の世界の響きではない。終盤のアルペジオの連なりが、時としてほぼ八長調を形成したのち、予兆のようなヴィオラのざわめきで全曲を閉じる。